

## 被災構造体の補修補強後の耐力変形性状評価研究委員会 幹事会議事録

日時：2004年5月7日（木）17:30～19:00

場所：（社）日本コンクリート工学協会 第2会議室

出席者：白井（委員長）、北山（幹事）、小林（幹事）、鈴木（委員）、  
松田（事務局）、田嶋（委員）、以上6名

欠席者：中村（副委員長）、衣笠（幹事）

### 資料

No.1 研究委員会・研究課題申込書、その他委員会設立に関する資料（白井）

No.2 補修・補強後の体力 - 変形性状例（鈴木）

No.3 鋼板巻立柱へのアングル補強の効果（鈴木）

### 議事内容

#### 1. 委員会の方向性について

資料 No.1 に基づいて、白井委員長より委員会設立までの経緯について説明があった。また、各幹事および鈴木委員より提出された本委員会への意見が報告された。概略は以下のとおりである。

< 中村副委員長、小林幹事 >

- ・被災構造体の補修補強に対象を限定し、委員会の方向性を明確にするべき。
- ・「復旧性能を明確にした耐震設計法の構築」が主目的である。
- ・FS委員会の性質上、1年目は大きな枠の議論が必要である。

< 北山幹事 >

- ・「既存構造体の性能評価」+「耐震補強後の性能評価」を考える。
- ・FS委員会の立場を考えると、中村・小林幹事のように対象を絞る方法も考えられる。

< 衣笠幹事 >

- ・「復旧性能を考慮した耐震設計法・耐震性能評価法の構築」が主目的である。
- ・復旧費用など、経済的観点を含めて議論することが重要である。
- ・構造物の収益性と耐震性のバランスを評価したい。

< 鈴木委員 >

- ・「経済性と補修・補強を含めた耐震設計法の構築」を目指す。
- ・被災構造体に限定せず、既存構造物も対象に含めるべき。
- ・例)構造耐力はレベル2の地震入力に対して決定。レベル3に対しては変形性能で対応。
- ・RC柱を鉄筋や鋼板で拘束する手法が有効であり、すでに実験データを蓄積している。

上記の意見に基づいて、委員会の方向性について議論した。議論の際に出された意見を以下に示す。

- ・建築分野では、既存構造物への対応が重要である。「被災」構造物に限定せず、広く構造物の「損傷」を対象としたい。
- ・土木分野では、「部材の性能と損傷量」や「地震動と損傷レベル」の対応付けができています。
- ・建築分野では、耐震診断を実施して「Is 指標」を用いて構造物の耐震性能を評価している。ただし、この手法により補強後の性能がどれだけ向上したのかを評価している研究例を調査する必要がある。
- ・構造物の耐震性能を評価する場合、動的解析を実施するのは一般的に困難であろう。Push Over 解析にもとづいた評価手法を構築する必要があると思われる。
- ・RC 構造物の性能評価を行う上で、鉄筋の性能評価にも注意を向けるべき。
- ・FS 委員会の性質上、まず1年目の成果に重点をおくのか、それとも3年間の活動を前提にして方向性を考えるのか判断する必要がある。
- ・委員会の方向性については、参加が予想される委員に依頼して適当な資料を持ちより、その上で議論するのが良いのでは？
- ・部材の修復方法とその効果に関してはデータの蓄積を行い、設計法に関しては将来像を見据えて体系的な議論をしましょう。
- ・本委員会ではなるべく多くの議論の場を設けて、議論を楽しみながら活動しましょう。

## 2. 委員会メンバーの人選について

各幹事より、委員会のメンバーが推薦された。以下に推薦されたメンバーを示す。

< 中村副委員長・小林幹事 >

伊藤 睦 (中部大), 齊藤 成彦 (山梨大)・岡野 (大林)・滝本 (清水)・島 弘 (高知工科大)

< 北山幹事 >

田才 晃 (横浜国大), 中村 隆也 (都立大)

< 鈴木委員 >

ショーボンドより1名, コンステックより1名

上記推薦メンバーに関して了承が得られた場合、来週末までに白井委員長宛に E-mail で連絡をする。その際、氏名、所属、メールアドレス (重要) を併せて報告すること。

なお、その他の委員推薦については委員長に一任する。

## 3. その他

資料 No.1 に示されている鈴木委員のメールアドレスが修正された。正しくは以下のとおりである。

suzuki-kaz@paw.hi-ho.ne.jp

以上